記錄曾我女黒船

全

655
2

楓山文庫

記録曽我女男松

本朝舎誓之

第一

六之奏

明治三六年九月十一日購求

好文堂

楓山文庫

遠へ門 13
號 655
巻 2

第一

目録

朱の盃御酒肴中のよい若女

はきものの舞ぬ袖返すぐもものぶるい女ぶれ法師

梶原ぐ一云い勢ぶぐ耳にくる物乃巣

結武士い結ぶて初笑い言い石橋山乃田出

第二　勅命の後いとゞ礼幸命と延る美酒

帝ゆが一云いきてめれえゆの美乃酒意
ゆのえのとうんて兄弟ゴ義経の紙経ゲ命ゲ
白鳥ゴ武蔵ゴ弁慶ゴ義経ゴ流ゲ意ゲ

第三　鎌倉の女房い流れを立てさまの西縁
内紀の金紙より延て打さゆりくれ女房
紀ゆえいもゆめ具ゴれ鎌倉ゴ居ゴり
敵ゴい内紀のゴ第ゴ立ゴとゆゴに神ゲ
信判

一　生の口編詞ゴ明末れ中のゴいゴ女ゴ

蹴の花嘉。今鬱乃和を伯ど。畢に勾踐れ讐を僕と。曹
涙ゴ敗の厚小死ゴ。ゴ重ゴ。我相浦家
中奥れ英雄。古文将彩細ゴ先年石橋ゴの合紙ゴ討
負ゴ。土肥の杉ゴ入鹿の岩屋れ明末れ中に流ゴ
ゴ。必死をのゴれて。伊東大場ゴ厚ゴ紙ゴ。ゴ
ゴと付ゴ。今日本ゴ。武蔵ゴ。ゴ。一天ゴ
ゴ。軍徳乃野ゴ。海ゴ
家ゴ。ゴ。ゴ。

物かたりされ侍ける。所本にて十二人の女と拾へば、其の事とは云ひながら、武士長久寺命ぜられと祈れる。別格の事、高野にて所本のおい姫、新堂と建させ給ひて名を改め、新堂と名付け、其の上に、おのれ、姫を建させ給ひ、あつめさせ給ふの事とは、いとせろ。上面の横笛にいふ。後に、五出の市姫、西望義経、先よさせ給ひ、先八ケ島の大ふ名、ゆしひくふ横笛とをつひそのおい家くれ、後にしる幕うこせ給ひ、あるこそ、世びしくて、姫ふ姫ろ、そのの笛と、姫立れば、嘶ろの後人、新堂、ふるびしけ、ぐ、大敵、初ねみとれ、みるびしてせ、いたの、楽屋ろ、ぐ、越の七ど抱のる、寺のすく、さいのほいゆ、ぐ、妹のる、行、部屋の入ろ、川れ、そ、る。緋のそろ、面、後ろ、今、後、の、のくぎろ、今、れ、牡丹ろ、めんぐ、庵、あや、れ、ぐ、ろ、ふ、れ、ハ、白、は、を、ど、ら、細、眉、い、ぞ、ろ、の、月、ぐ、ふ、出、ろ、て、こと、ろ、び、眉、い、世、ぞ、を、あ、ご、ひ、ど。

ひ、き、ど、ぞ、ど、ろ、れ、ね、ど、ど、そ、人、袖、と、ろ、て、ぞ、く、ど、ぞ、の、ま、ま、ど、ろ。
き、ど、川、の、ま、ま、ぞ、ど、の、ま、ど、ど、ど

近ごろ江戸にて。花で有の沼者。木へうつて。ぼくを体ろうをするの
業数を為。八幡大井戸辺。魚あるさつ。ぬで。ほしてと。行れば。
彼ぼくを。さ。行ごとに。行つど。行ものの。所本の中より出て。ぼくをつんで
する事。度々。ぼくを。入ごとに。ぼくを。ぼくの。中へ。入て。焼れ。ぼくを。
服と体の事。ぼくごと。ぼくの。中へ。常。ぼくを。住所。体本の中へ。常。ぼくを。
と。見て。ぼくを。行ある。体本の中へ。焼れ。ぼくを。獣。入れ。
ぼくを。ぼくを。入て。ぼくを。ぼくの。中へ。入て。ぼくを。ぼくの。中へ。入て

ゑとりみやうげて閉いれ。その薬のうへ
薬の傳は手に出ぬ事なり是をすくひ剪び板あぶり物をのせて。湯とあ
ぶりたる方後をぬげ水薬とうけ出すらいぬるくをゆにはるこだるを
いて。ゆんとうつあるこにいきいまれる。湯をこみ入て。ぬどぐそする曲者
わんぺいどうあせてもあとれいあれはふいうてぷーてもく。我者の中今
とすくひと。是ぐ薬きわーげきくぶ。再にほてゆくもひるいぷ方
手負の傳方をてだ傳と二わ我者はせあうる分ぐ。働くよ。と家
ぐ。欲れたれをたとけてい。二服ぐうゆ。れ家傳をて。湯のあ生れ風
よにも薬のよあぐ。若は傳人のうちわう。お味方ゆて出今てうう
脚かてこて。だ有を家者でもいいうぐれ過者のまーげと働とと。
よい事ぐ薬う。るる者でたゆうくうぶかてそれ。薬ひ本の中にかく
せーりのいあれたさまうとるとゆ。てういぷうにもゆにあまれくへ

あるにてゆて。れはたるふぐ眼のうろぐ。いうちいぷはあの中いぷ傳のにてものそう
すまもさせるいと。眼とむさあいいひられぐ板あもいひうぐうぷ傳のふえ
れはをうれとうつ。薬ひのせう合にたのうつ。ぬ方力にとうけて。血服
いぬていぐみのへい小宗様ぐたうる。うあ。ぬはあのめーとづまーれとあ
方と押さづめ。手負にあうとうる。ぷ。白い者は者今ぬをのけるふぐ
下ぬひとうすあに。希るこの口傳ぬ。ぐうあうるうまひぬ
あさいふれ傳のとい。約多ふいいひあぐ。薬ぬのゆ分ぐ。とい手ろ傳
ふの方傳をうて。ぬうんとの事そ。ふりあれぐ。ぬ方のいひ
とぐ。手ぬうぐ。いて。薬ぐ人ぐ二意ぬ傳とうぐ。ぬ方のゆから。ぬ事ゆに
ぬうーぐぐ。ぐ今傳い手ぬにあいぐぐ。ぬうと。ぬ方ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。云
ゆ手傳と。ぬ。海ぬ本の中ぬ入ぬ。ゆ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
うーぬ。ぬ出ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

詞をのみとゝ。寸保中に入り。おく。野辺がわの人をいざなひ出れば。酒を
はくとゝりゆぐつゝに。汗みざる。寸保つゝ。まのつゝにて。野辺たゝ
がおどりうるゝどと。ゝにとゝ事。島のあたい川合あつゝれ。辛忍
のぶゝ事。のゝゆゝあ人ゝゝゝゝけゝ

二　動面の洞いこゞれ幸いのゝとのゞる薬酒

はくゞゝ野辺。ゝゝ。ゝゝ人ゝの川。ゝゝゝゝ。神乃なんゞゝ乃
ゆゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ。その七月月ゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゑつぶ島山と称する初めて昆沙門の銀へお供や。
九さと語がひろうゆてゆ徒や物ゆせんとぞおくびとのんでひろくてり。
暗くありて手元ゆ手元ゆ見ゆ。抓人々目の中ゆ。
ねこと見たとうるひ。ひ赤木の子ゆ入て。いよく山ゆ命本を
の山ゆ行ゆあの山ゆ行ゆいさふらどや。海や関場お司房え
ひ所本を行て。命本くろ行や。若ゆも山風さて。四ゆ所
命本と唱ゆ。ひ。この山さえてゆ。いろ房えの名付れ。
でく。命ゆも。叔命先。山。梅ゆ先。あるべと。昆本。山。出ゆ
れ。ゆ。ゆ。の舞。ゆて。ゆ。ゆ。ゆ

こゝに自余の科人なれば科ゆるすべきの理出ずして脇て脇の法ゝとなあ万ずあべきのあくもまたくあるひまてあれば おそれ
あゞ君子に云ふとゆ事と。我君子いはん先人をうやまゝ。ぞゞうて姫君
と。祐つゝいはけをさるゝ物。不義と働く不孝のゆなる物なるする
とい。科ゆゞ始よあべ。他の科人同断よ。罪ときつひ入るてゆも
いとうる事なれと。立義へ行法されはよ。他とい姫君れい我君のは
ゝ事といよゆゞとゆ。為乱とあるとい。親子のゆ縁いきれれいとん
あいのいろゝとけうてゆ。勿るきれとい。非人ゆゞさ。ばよ。い事最
実ゝ人あるはるれいゆ。教名あるとて。ゆゝの姫伝法ひいさのゆ法い
これ知るほ。てい君ゆ者人命ゆ事ゆ。法ゝ待。法を仕事とゆ。
あんとゆ知るゝゝとゆ。ゆとゆ。てやさるれいゆ。持ゞん法ゝあゞて。
知はゝふとゝれ。法ゝれあゝ行ゝの吉例とまるゆ。悪の業とゆ

ゆゞけて。脇ゆゆゝと。歌ゆ法ゆゝとゆ。神ゆの働さ。他んとゆ
念れとゝて。ゆゝ二人をゆゝさゝるゝゆ。ゆれゝてゝ。ゆゝ
伝われい。義ゆ。面ゆゝてゝ。おんとゝ。他ゆ。ゆゝゆゝとゝる
ゞ。ゝゝゆゝ伝ゝ。脇ゆ。事ゞけの働いゆゝゞ。君とたゝゝる
十信のゝゆゞ。事ゝゝ。君の人命とすゝゝゝ。前傍めゝゝゝゆ
知はゝふゞゝ。おゝ。傍の業とゆ。ゝ。脇ゆ。知ゝ
祐ゆ。ゆて。いゝんで。ゝ。知へゝゝ。ゝゝ。ゆ。法ゝ。
おゝゆの。ゆゝと。ゆゝゝて。ゝ。ゝ。ゝ。ゆ。ゝ。ゝ。
ゆゝ。義紙。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝゝゝゝゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

くれいけさとゝゆんにておさるゝのあくとゝ名我に対していそれ
ぬ足手ゞ形ひ二義と出船をきれてゝなされまいて。それいづ義の
出ひ〇にあゝ手ゝつくれ及海ゞが横合〳〵の移ゞひ仕〳〵・二義ゞ死刑
と形ひゆゝせ祇つ〇ゝゝゝるのれとれ合ゝ。そゝゝやゝねまゝう
さゝとゝ祇ゝ行れいゝ。ゝ行ゝふ指にとゝゝ〇。とのれに形ゝゝるにゝあゞ。
手ゝ名ゝと形ゝ。形ゝゝ形ひゝ足手と横ゝゝゝゝとゝゝぬめゝ
そ横合ゝゝ。形ゝゝゝゝゝよ出ゝゝゝゝゝ

ゐんとゐめ。ゐるすとゐ代は西ゐ色。今紅ゐ色。桜くの色。ゐ。ゐ
まる妻も女けまべ一まのこれ。我同こ入ゐ。ゐ女もゐが。妻くゐて
結んと。所の紙てゐけの。ゐ紙ゐ紙けくひ紙の。ゐゐはゐこゐ命ゐ色
けゐけまゐ。いまゐ。我ゐゐけ。ゐ女もゐ。ゐ。ゐるゐ乃ゐ
ゐの義。ゐ一ゐ。ゐゐ。奴ゐ女ゐが。鬱新。鬱ゐゐゐくゐゐ。
人ゐゐゐ入。今紅ゐゐ。ゐ紙ゐ。ゐ紙ゐ。ゐ紙

虎和。或い蒙法乃至あどのかい。国利者ぞひでもろくよ。雖法ろう人
の国利を軽んで。人倫ものいかどのわがみてもあぶることてりしてて
かりおとでるけまこべけわ侯がりくいとぷにもろべつき戻せば。亀
にまろう男ひつくして。貧の正とあしぷ代わて全うすぐ高貴か
らどやぷそれよ。貧和のろうきひてぷ。色の全れ用にあまいては。
石仙めいひがん孤と捨てけ円へうけのぷ。ふ戻りていこかさね
くぷひつくういひくくとパテつまりぬ。行者おかつもゆうかぷけ方こと云
と切れ。貧和いどみゆうもあつもれいいさあぷゆうかろくい。貧
庫りもどうへ拾てどろくく。聞性んどけのちくにいぷ。吳云の乙面
よ人全かろくまもこげくて。知へいがとれうばうさぬとよぷ行代
く拾つくと感状のあろ者てに恋をつけうもくぷいをうぬと。
かとんがりふゆとうけまどぷくの。和別さくに代に拾はにうべ。

ぷの部ぢ詭と面和よいあげとぷそうがんひくく見こ云仏色の用て。
粒をるしてれわいる面。亀を乙仏式行ぷのあるよいさがんにてゆうぷを
こいうにていひあてくぷ代ぷたろうぷろ別れ沈牙をゆてぷゆうふろくと
を拾てはあるくろいぷ用法わる仏信へくろくく挿さ拾用拾てどさ
つてにぷそもんどかとまあわといつゆくよぷ。ぷのどんどてのつひどんぷ
ぷあ方ぷ拾んいとてぷ方のくく合ひもあゆろくとうべぷ拾りまい。
どのろ一国ろすもふと。伴の名庫ぞくろの去刀と拾てろくろ国利
とろんて情ろうあどひ出て。再遍ろくくトに面ぷのろれるゆんろくいくあ
もは拾法什ん。迷のくに具ろくも拾ん什んと。拾ろくぷろもろれば。
かくれるの逆ぷ深け還るれいぷろくくの面ものの拾とどりぷこくくあ
こるろれのはあ拾のあろくでどざろう。伴ぷかかれれてお紙ろさろう。
ぷろろくどれの国よいぷ拾ろろ庫くゆいぷ。ろ千あでも云ろあでもぷ国ぷ

立合ひの御ぶるまいと念を入れたれば、
たちまち御人もござり候と申してあれば、自然金子にあぶ、二朱出て種が
あれに付いろいろ申さねばそれも武士の言葉
うしろ面目をたてわらてこわらん法人を出ていめつくぶをさへ
法人を立ちあいぶる男ひとりいくぶ笑ひしてもいたのない位あいた
やさあ仕はるれば行たはあわ仕ぐやあ
御合ってい法人ぐるるとあっぱちるれぶ
法人いろれるあいけんの法のあわ
もあるれぶひろもあ法庵さんあ
あやあ面あい親方ろれてこすこ法
あ御人といへば体武家ょ
なれた。其方の刀のくやあ。安の法人
お法人あ面でうんぐこうせぶ

お法人い出ていこすこ法ぶ
屋もあ法色ろれ法色ぶ
庵ぶ法庵ぶ法ぶ法ぶ
てゆてとうまんぐ法ぶ
ふ親体のろふ親れるぶ
ゆせのていへぶそふろの
一ふ持ふ対表面ぶ
事ふあぶ法ぶてこぶれぶ
きふぐ親ひぐ出ぶとすると法ふこれ法
法ひふてこぶ法ぶ法ぶ
ぶ法ふ法れぶ法ぶ法ぶ
ふ法ぶ法ぶ法ぶ法ぶ
ふ法ぶ法ぶ法ぶ法ぶ

きていたりけるそこなる女にあひぬ。顔のうつくしき
宿をとりてやまさせて。男物を出さんとすれば。前ぶけ
なれば。女房ぶりをしてゆきとりてゆきぬ。パテ伝のそこなる紙をうばひぬ。
くつわをつまのぬぎ雑にもぬきかふまに。ぬきたるよりいとれぬ。ごとやお
きぶりひあやまりぬ。そのうちさんのうちにてごうのうべ。男子が七十あまりとりやとそのか
さぶ。ぬるうちぬぎてをぶりてこの色ぬぎたる戸棚に。男子の金をあり。
形もさねぶ。金をうばひとれば。ぬぎ色ぬぎ。ぬぎたるうちに。
面をねいぶ。ぬぎ色ぬぎ。ぬぎたるうちに。
あのわるぶ。ぬぎ色ぬぎ。ぬぎたるうちに。
とりかへて。金をのぬぎ色ぬぎ。ぬぎたるうちに。
いかもあさぬぎ色ぬぎ。ぬぎたるうちに。

六之巻終

記録曽我女黒船　付　奇特翁会　第二

七之巻

目録

第一　押付業を分けるから。そのうちの懲ぶ。
色にて深で離をふくい。牧場の里通
親方と前ぶけ。多い。仮虎一さを大実
分けを足抑て。俳を後の小判

第二　身体の大きな女房と一つ縄ふくる雑俵
糊もきかぬ仕舞の渋い科を流むる紙屋
主殺し此乱舞をとゆさ三四一乃科人
形るこの色でねいでとゆ神乃かくしばま

第三　足のみる女房と人くるて泣さる方後の濡衣
主の足に忍び寄て附箋とねいでり俵云
俗りい拾くとげ坊さわ泣く俵の付髪
身体の合いよい河むるれ時さ女房ぶ働さ

一　押付業か身体於舞ういてゆるくるまぐ俵文
徒の戯楽ぱ。ぱるを乱し身を元ちの中立ち。ち中ゆ色
熟くをんて才工とん。男性の大も。女にあいて目のゆい元の間乃
鼠と照と。拾ろん毎のよせ左鼠。ぶくける方俵の里。紙ひき大役。
高も拾ろと女房と名付くるに泣ないけく。面紙ろでひろ
とあ。俵の鼠向いかぐ。元。絶の表市にろ出さ。ちのはを
名ろ立し。ひごまひ虎とそくさぐんとぷ判で歳と大坂ものく
のか茂をりつれて。毎和しはようんぐ。ちゆ元度ろくと
ても拾ろまを茂ものく。ろ俵あげぐくたのろ出。我ろけも
手かさぶ。ちまよ元を元ろけ。ぐふの役日もけぐ。ぶいち。
つもりもせび。虎よつるたけ。毎俵や。ぶ茂一表日もつぎ

とめ。ぢいは。ばくさい。ぢいは。ばくさいの。氣敷ださい。ばくさいの
ぢいは。ばくさい。ぢいは。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの
外々る。ぢいは。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの
もきはつてたぢのもの。ぢいは。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの
紙方とつくるもの。ぢいは。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの
の前とも。ぢいは。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの
もぢいは。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの
つくりて。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの
紙ぢいは。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの
んとかくしひとるもの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの
ぢいは。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの

の大ぢるに。ぢいは。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの
ぢいは。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの
らでも。ぢいは。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの
紙でい。ぢいは。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの
つくりのと。ぢいは。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの
ざりこいくもの。ぢいは。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの
ぢいは。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの
中もと。ぢいは。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの
とやたゝれどこ。ぢいは。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの
つくりや。ぢいは。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの
るれども。ぢいは。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの
や。ぢいは。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの。ばくさいの

わさのふなを
ぎりもんてゐろ
わげやとてゐる
きのどくろ
ぬぎゃうれ
ぎりもんてゐろ
大いそのぞち
太郎丸方へ
うけくれまいと
ひぞりたごこのむ
ふうや
せしろ
そこらあや方
そろ点てうんとする
ふなを
ぎーこゐろ
ふうやう
えひろ
ぬぎゃうれ
きぜいまろ
そこらぎれ
ゐんぎまろ
仏丸丸まき
ろうとうけろ
私の方仏
げうもそこと
ふげうまろ

ふるもとら和も立へ家ねぎこら伝方ゑいゆ公の侯会もとうのう
まやらこいひそれい夫ぬいどてもいひそうす楠作の庵ぢでかこいこと
いひそけ方ぬもたぢ一ちあそうゆ若たかうこでやく虎友のさん
用し親方の子多聖ていたくのらぶ今年一年い祝まそ年一年い
子女の代会て二年と砂市ぬよ業ぐりいて今とぬ元まれと
ひ方ぬ和の伝よ主ろく親方のの和おそく和和ちの伝教ちうとび
しいおこ和にどんる浦ろ社男ござこつぶひと和とい今ひうあ
大代のおろけるの和の若こいけどあるゆ和をおひらく伝もゆまるわさ
わ高ぬ代ちとおてうけれ伝家ぬ家といひなそ主ぐにおちん家へ一押
よゆぬもお代ちいひ対れいぶ主すぐお子のゆ若ちん行ごうまちよ
ぐういお働ぞれ女房ぬおうご主子ちうやこちもお代ちぞいつけぶ
房ひとて親方ぬ和いぬ和れのつぶ人の和ぐ会ぬ和うん

ぶ房ゑ偽つけてぶてゆうておちちもぶ世うどれいうきぶちんた
高のわ家とちし野ちうつていひそれいぶ出若ち今い和ちにあちら
おくそちいうぞしてぶはくちぶ世とぶれて出んと主ちとちきぶ
ひちふまとひくわれいぶのわまゆよ代ちゆくの和ま代ぐれそれて
そちぐ同ぶ出ちとあつてぶちちと出ちぶよ代まいちぶそちいゆちいね
ぶ出ち高ちくちの親代をそ人んで和れ町人ぶとつちゆちに伝行と
おやちくぶ和ちぶ世ちと主ち代てち人んと主きちうてゆけとぶていちる
まぬおくまとちぶ房ぶいきていゆ世メせど和とちうちくぐちうち代まし
ちうひぶせちるちく親ちとちぶよ人ゆれぶ和ちゆく親ちとち高のもあち
ち和ま代て房ぶひちぐ代ちくちの若ぶ世まゆくとりそち
やとれい親ゆちのぶち親方に和ても世の和伝横ぶぐちちとゆ
房くちれた全世ぶとちうて場ちとれいぶとれちと

尾ようなぶしたの乳房のくだまつてゝしれがぷよくとのれが私とたてゝ心臓たれ
のおこれわたくしの天井の四方へぶ紀方がうの私をてゝ踊りてゝ動くとゝたち
ゆてゝ行きまつくゝろはしさのゆらゆゆゝ今毛に色ゝ云ゆゝ人ゝそのれたゝ
上ゝのゝ毛穴ゝ抱てのれしぷゝそのゝ体ゝ人ゝ行ゝゝ人ゝ行ゝゝ人ゝ行ゝゝ人ゝ
うゝ紀方のいひぶんがゝゝぷゝいひぶんがゝゝぷゝいひぶんがゝゝぷゝ
行ゝとのれを宰へ井色ゝ行ゝゝ行ゝゝ行ゝゝ行ゝゝ行ゝゝ行ゝゝ行ゝゝ行ゝゝ
月めぐれ毛ゝあゝこゝのゝ月へゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぞやのうあさけどの庵もさい今とて今宿せこの世ちとて南無てこの
さしぶのうえもあいに嶽の庵と芝居きらめて横ゝおてとゆそぐう
やうやのまぐるこゝとすてこれに新月出てそ月ろう金の
あそもやせなあゆひやげとけるうあらとぐ出ぐ人ちぐ
さんと紛わうゝお別れうけさ親方れ行ゆまば一あるけてぐんを
出ぐこのるいとパテせ来ぐあいうろ抜そゆゝ以世抜もわれ
どおるうるれい抜もえ私ら出おのまこのちやうあるこれ出ぐ
さんぺ今宿ゝとて今ちてせ出ぐ出ぐとぐるまの中とつれて出れ
ばぐゆゝにつれて出てさんさんせぐいるいぐ虎牙ぺぐゝひの抜出ぐ
へもとそづてあゝとぐゝあるぐ天地ひゝろうゝてもぐ出てうぐゝ
いいとしまあゝぐゝうゝの用ゝ角そぐ抜とうのれば親方もゆ出
ちもあゝそ抜ゝそけとパぐれとゝ入あうゆてぐ出ゝとゝ外ゝ出

ま宗美のかぐれ出ゝ抜ぐゝて抜ゝて抜れぐかぐうゝて親方ぺ虎とれ
てゝ出ゝとあゆ出ぐ抜ぐ宗ゝ抜ゝ宗ゝ抜れぐ抜ゝ抜ゝ抜ゝ抜ゝ
ゝゝ出ゝてゆ抜ゝ抜ゝ抜ゝ抜ゝ抜ゝ抜ゝ抜ゝ抜ゝ抜ゝ抜ゝ抜ゝ
ゝて親方ぺゆゝぐゝぐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てぐぐゝれゝぐゝゝれゝぐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝて抜ゝて一抜ゝて抜ゝ抜ゝ抜ゝ抜ゝ抜ゝ抜ゝ抜ゝ抜ゝ抜ゝ

二　月待の大井出

ゝゝも今ゝれゝきゝ人今ゝ抜ゝ抜ゝ抜ゝ抜ゝ抜ゝ抜ゝ抜ゝ抜ゝ抜ゝ抜

きこえくいてでぞよいものかとて高雲てひろまの中にも公儀
しくさるもしかるて京もていもの怪異ぞくれでござうほとおのの
れのおのおのを作られての山おいの神の怪者いとやとうぞうの使者
は遠国中山あるゆるとに入りされ天狗でめたれ狗でめるもお用うけら
れてとされく怪為ある行たくてせばろうやてつやく身い松風のあ
ひとめくい来ばそ方にの食事あるつ八年のおいに松方ようの知りうそけい
せいまとに来しし女幼子いれるいるとつるて金ばてくれるまとぶたるとて度
金をに金銭やこやいぶげやるぐ〜ちとまるてぞるまけのるいはゆる
ようばうくおてのある男られば金銭やへ行てるのとてしのとまれる
ひとりおのく母抱の松方れのもとて金銭てくばかりそのあるく大
切あるとまるみばげいひとれば京るれの新れといがんろ明りばんろく
ととらくいるくるらいはるとそれいあげやにておるのこのお家や

は松をつくすぐ高雲られば大まろがくこのはなるとにばかるるとすの
めるいねまれるそるやくるまとやて抱の松方これあればそれへはか
と鼻おくそ虎いかごのくらにてそとゆるかごの石海そるとれてなりと
鼻とりて伴の行れてそくれ松りくは里へらいさら母なるに来さるべ
名を行とうい松りまでござんとぶ大切かるるでるるとあればなり
ぞ出そうんいられれでなのくのおるひとくばくそらぶ松りまるは来
た行ぞやよるる方ぶくいい出来の松松といるかとあればるるかん
とやはばぶくれ鼻とりかごこの口実ぬるそるまてごんとるるはる活
人でくてこれするみまてもとづりてちさんちくとるるつげまとひ
くればるの行ぞ和まととび付いるくりんぶ様ときまるりそれいま
しめとりおとれば男て和まる男松まる鼻松まゆく虎ぶくまとしろへ
山いしぞて縄をぞるけるるそ虎いるるときまとくてず方にられて

河内国ふかたに住たる百姓ありけり。年の行よりひぢ安いかりさいに出里の花
見に行人員に入るべきの人々とあり。月待て明る人の妻女も同
おなじの女房にひきうつ縄をかけらるゝかの悪いめぐりに女房の縄
をとりておやまりてとられたるとさげ後をあくべきにとりてそれを
人のいろとおぐらまるとて車ひきうつりいのひとれいの行ゆくこと名ひ。
一夜ぐれの節女房ぞの無て女房ぞのの婦妻ぞのとなりてれな
うの行つんつんせいお屠くらまくてひまゆりあひに月出おる
ゆゆ庵ぐ。ぶくちくいひとれいゞやかさあてら行くふ。とれの男ぐふ
縄ひけさせあの男にておくとうまりてあるぐさやとさげ
後をいてさそれといつ切刻ゐ。合けと刀ふとうけ後ひつれいとと
まだけ女ひとくるの女房みパテんぐ車後あとうけけ。
わいだとれの妻にて寝ぐ。でもまびいさそれなと果眼ゆて

いへばいとそ那とびれ仕合。それく行たおのりのぐるゆとうるおれ
水ひるゆまるの縄とのゆとしひ行れ。れぶ。たいひ後とそ。いさん流
まる行とれよ拵でもけてみよかさうとうそ切ぐ。ひ。と後と。
ぶぐうさすぐるとゆ。記みそい一番れ。れ。ぶいく。虎石の初石ゆ
て縄とおけみさくい拵ゆまるんぶ。そゆ。そのうそ
出拵ゆまるけけぐ。くるまたれて見堪のよい主ぐうぐさり
陸ぐ。ぶ。ぶ。ぶ。拵ぐるうぐさり陸ぐと。ぶ。ぶ。と。ぶ。ぶ。出ぐる。
あるぐがぶぐひるぶ。ぶ。ぶ。

人形と見しとそうとを取り出て取てあるに別
関白さのはをへいしとしがつ様が一家一族と金仏いてるこの行ようてかのんを考て云した。
い様が一家一族と金仏いてるこの行ようてかのんを考て云した。
あ親一家も絶えて様一人残国よりあとはれ分て様の生あとかるる
て関をうくにたつの年大病のもぐかいはいをたに出せてうやに
つさ関白さら年て作れたを捕にまりしぶ法ふさ方のをんみる
るひ虎い女房ー様つれいたるれいぶ様の様ひとのれいるほど縄くられ
よとしひくれいたい坊丸い様のうこ去のごくにあてコレ方てとれごこ
ホ女房でまけるいるいい出てて様の関係に行られてらりの
たとしるひ様ようそしひくれいぶやを方も化粧て行そう様ーるあと
様でに様ぶいくと色ぶ私の様ぶ名をあーうドド様完るるを人は
里へ来ーうそいに行おるとよびせて商売様の一家の作りうぶない

けいせいで妻女にせうり身待をびぶれの年ぶいひぶりけやあるまり。
虎よおのそひ方ものも正部の中ぶ様ようて絶うけそしてごされぶ様ようい様
様ちぶいあいうぶのの行もをとうてさーうて行いるうぶ海亀る様
方とぶ年考ぶ人組様へのぶりうまらくてぶの様年ぶ様宿様ぶ年乃
切女ー様屋のぶ年様方ぶこあどとれといひ法せよぶ様去い因人
をつれ様ぶさあく女様でもうーるうぶおせの因果とぶひのるやぶや
来れと様ようもでにものをどぶ虎山おとりぶゆんとせ様ぶ奥の
様変ぶ名あ様ぶ様ーげーー様びあうぶ因全ぶのぶれるあるの様よとぶ
てどうる女ようる様けーー大ぶ様れる様ぶさて様ようおぶの様ようれをうけれ
自分い様様乃の年わるの様ぶいて様ようの山年のかん。
ぶ人を様ーー金ようて様ぶ様ようて様ようて様ようい分様いりまで。
羅様ようれいれんぶ乃ぶるぐ様里へ様ようれぶ金仏のとぶ虎ようやが

ゆうんがいのうれおれしゆへ。縄とうけれいなごつゝや女こゝ方いゝ出のかゝ
りんが様ゝ係まつれたつゝ。切ゐいゝ行らつて。出へ十文の所。なまこた
まゝ様ごつかちぐつてゝこゝ。ゐ。ちぐつてゝ。ゐ。ゐ。虎洞ゝゐれか
ゝ。ゐ。ゐ。義とあげ洞を押のごひてごうゝ。ゐ。ゐ。ゐ

[illegible]の縁の縄を切りて[illegible]
やとりのぼりさわぐとまうせしかども
大ぶり[illegible]といをのれが来
ちいてこそ[illegible]
のかりぬ[illegible]
[illegible]きてこれと牙をうんでいかれば[illegible]
[illegible]
[illegible]

さいしのわるしばそのことをはるもろひとをひしひしぼまのの悪幸にてをるず
ずも料理をしてはるをれしぼうぐひこれ潤をうぐ抱かん作のの信
るのひそのしを料としてだいそれをあるをと付て料るを蛙を縄うの
しばくば殺してもわきをぬのうものの笑作せいをいうるるぐる
行をれそうをんとれ行をぼうをとうとうをけを表て大分の後力のの。
かるんを苦るのをれてをしに式をぼふ若をしろ々法蛇をうんで縛ら
つけんを行をしが抱をもうを蛇をよいわでの男のうをにをぼれし
を抱い作るわ後。抱をを性稀弱れを砕作ぬが左まをおづをを虎れの
潮を危うぎ出ぼう料としを方後をいを。今あに金蛇のをまれを縛ら
ら金ををめををうをを分ぼやきをうをを抱をを料ををうをの男ぼ。赤
く抱をおををまくをんを打柳をうをををひをんをしを未虎い作をうを安
らうををぼ神をを後ををひぼを抱を料

をれををあをを料をををを付。私を俗な縄をひをんをををいをををを。
その孫ををい付い私を迷をを出あの男をれをあげやをををををのをを云
のをおをのををまをををぼ方を金をを作ををををををををををををの
るをををんををぼちをわをのををををををけををををををををををを
かをををををぼを時ををを古出をれををををををををををををを。
をを作をを私の作をを出家を周ををををををををををををを人を。
のを作を出をを作をををををの作を私ををををを作をを作を作を作を。
虎を虎をを作をを作をを作を作を作を作を作を作を作を作を作を作を。
を私を作を作を作を作を作を作を作を作を作を作を作を作を作を作を。
を作を作を作を作を作を作を作を作を作を作を作を作を作を作を作を。
を作を作を作を作を作を作を作を作を作を作を作を作を作を作を作を。

行れて。そ俵ひ里にてとりてござゆ。ゆ。ゆ。

うちのはなをとりてぞ歌ども。法師ども。いたくいのちい
のうたの屋にあけまいて。ひつじ。今をあるべき祈めの才ごう。何とて
ひとをとりてぞ。その法をかけらるべき方に才の方とつひ出ぬと
つひ。祝ひうけて。ふるべ。ものもめてやうのうぜちあげ
づめの大ばくいとぞれ。あるくべき人ゆ。ふたの一ま大坊丸。ぬるる
して通るれば。ぞおもてれとい。ちゑ。ぜ。ぜ。ぜ

歌の方へ虎とゆって、祇園会いたづらばかりにて人は面白いさんぬ。
三人会のことやお坊。為我女房ひろいて虎と角ばりんぐゆったが
うげことさてお。親方へ為手をといて、高ぐ出りてつれて行ぐ虎女
門おいって接ぐんようくるとと出んこ。ゆやお坊宮へ来て敬せいと。一
このようひろいぐ。お坊もお為手もぐらい場面ぐ出てうと
ちゃこちゃくおぐれめと。ぐ一人わるにぬぐ。ぐの行と三七人れてぐれ
ばぐいさやひゆくれてぐお坊お為手をみげてゆくう

七之巻終

記録置我女黒船　はな　幸初會稽山　第三　八之巻

目録

第一　実の母い白拍子舞戻る　君よ九里山
女房ぐ口三味線ぐ来てかくれさ実ぐ母ぐ
盗人い入ぐ入ぐ人全ぐ大事の刀ぐ盗
大ぐお手と子耳ぐさむ伯父ぐ新法

第二　教訓八ツ[illegible]ハ親の祈人
[illegible]盗乃一刀しかし浮世の辻[illegible]
[illegible]ゆゝ[illegible]一通乃[illegible]
歌といふ白髪の親に対して悔しい事男

第三　ひとりぬけ孝をかきらに不義の[illegible]
盗和[illegible]穿鑿い座をたく[illegible]
結構な親の[illegible]れい者ハ乃[illegible]
風のおれ仏[illegible]火消うゝ親の命

一実の無い白物ゝ[illegible]
不孝にこうあり[illegible]
[illegible]と断絶すると第一の[illegible]
[illegible]
代りの[illegible]
けゝふ[illegible]
[illegible]
[illegible]

といいそびて。今はかかる方と釈かれいつの世ぞ。ぞ。まいらせんばかりにもいつ
こそ体式のきぐんのようにかとそこそこすれば。ぞとより嘩にすま
まる程つぼ。まいらせいまいらせ。まいらせ。毎くゆるめれば。絶無ロ人事と
こふづさ。ハテそれこそのまいこそ入こそ。ぞ。入て来てちこそれこいつ。見は
振ゆ。亀て。図絵。社ぬ。ぞ。ぞ。合て。ちこそ。ちこそ。ちこそ

休武ゞ女者
きりつぶせ
あちゃ休武
おどろく
ぶるぶる
ぶるぶる
ぶるぶる

のうの生まれつきは、目はたかの様なくぼ、
まゆはさかとい不仁な出来の人物なり。
それにふひような経歴。古已甲金俵の
ものこと。金盗人の和尚にねとまれ
ねも書くゆえ。ぬるひるしべさのこ体式は公人のまき
ゆえの見くらいいびきかれ人よいさゆえに釈のまとめさえない
くざるなど。書よいよのこと。扱て。面と扱どこいろ。俗めも釈こと
のひ人をこのれゆとてそれるい人倫のろくひろ。面ねさゆれ
ものとぬめ。出ろの体式と金の釈より五まにけ。みのるにても体
釈しけたぶ出合。い倫仕ぬ。みゆ乃び体式基にけれんとんび海
釈と行。そ出ろとたとるるびけ。ひ人ろのくはこ。ぬの釈と釈こ也
よこのおの人の教よくはこまてり人ろ。ぬ出書文のろ。あき書を文
べ。ゆくく釈こまあ。ひろおろ手に。ひてい。ぬもをるゆく体式に釈

せて。出ろにはせよ。ろふせよ。出ろこの方と。ろまに乃ろ。ひ乃ろ
釈と見ひそび。まあ手に海をあく釈面。ぬと釈ても何をぬこと。
よくるひよくいひゆメせべ。ゑ手ゑ釈ひ。ゑ手ゑ釈ひて。ゑ乃ゆ天ぬ釈ひ手面。
てあゆまろ人ぬ。ひれていゆ。ゑ州と。ゑすう。出ろこ書と乃こ中さんを
いんべ。く嫁りくそし虎ゑの菊。出ろ。れとくゆれべ虎
釈ろゆと使ひ。菊品に出ろろ。釈ろ乃ゑゆろふひそろふまろ。ぬん
ぬろひ。釈こと釈ぐろこの嫁。ゑれゆ出品。釈の出ゆ釈ひ。ぬ出ゆこよ
ぐれ男ゑ体式方へ嫁へせ。ろもひ。乃ゆ釈のろ。ゆあろ。ゆ。ひ後の
体式へろぐろ。ひ出ぐくんろれど。ろ釈こと乃ゑこ。ゆ。ゆ。男と
釈ゆる。ひ屋。女の釈合。ゆぐ。ゆ。ゆ。ゆ

が行くんでもぴかりとしよぼの男とうけとり。おさと世話をおも。
河はなんぞ行くの遠江浜の濱。兵に墓え拾の砂。名根の別面れ細石
姉さまを入を吸。まれの女切丸とぴそうに行う垂いと異さぐうで
あ子面に叩みくぐんこねぴうわくいねあぐ。兵庫浜のちかとたん体
部方へ貸さおれ浜あぐ金ホるの子を活てぴ子ぬう個へ虎どの
と出方へ行ちも引けホ浜あくいつ面があれば他へ貸へつらと
より性か来こね。ここ引け面こうあて。面月たいよい猛金ろ二花
扶へまぶれて。別面方に一家ぴ。なれの左切丸とん行ちんの庫ダ
と。ぴたの庫え方ぴぬうあれて別面れ体へ問元あうう。見ちう
て別面。うあ丸と吹来ぴれ。四ぬく庫ぐれぴ。ぬぬて一吸ぬ面
入ぴまぬて丸ぴまうれ。貸ぴうう庫こん金いあ。浜面方
みて四行ぬぴ。彼ここい体元ぴ。元ぴ入頃とあう。面ぬ

ゆ人母のよつぐに盗ぬぬぐ吸いあぬぬ。紙面入いあうの吸ぬこて。家元の人
ちれで入て面ぬぐ。ぬの行出ぐぬぬ。ぬとあぬこ問ぬうあと
吸行ぬぬぬぬ。ぬぬ行きいぬて出耳ぬ人ぐ。男ぬ問ぬこと
ひぬうに行ぐひ出ぬ出ぬ。ぬ乃ぐ体面方の吸ぬと切二ケ面の二ぬ面へ出
入ぐこのぬぬぬと金ぬぬ吸ぬ。ぬ出ぬんぬぬ。ぬ今ぬ行ぐの男ぬが。紀ぬぐぬ
てぐぬぬぬぐこんぬぬ。ぬ近ぬに問ぬぬい吸ぬ地の行て股ぬ実人ぬ白
ハ面ぬぐぬぬて松ぬぐ。男ぬい男体ぬて面ぬぐぬ男ぬと切ぬ行ぬ
ぬぬぬて松面のぬぐぬぬぬぐぬ。ぬけぬ面ぬ。ぬ我ぬぬ行ぬい
やぬ浜ぐ。ぬの世話ぐ長面ぬ行ぐ人ぬぬ。ぬぬぬぬぬぬぬぬ。
男ぬ面ぬ牙ぬぐぐぐぐ行ぬぬ。ぬ面ぬぐ人ぬぐ。ぬ母のまぬぬ。ぬ体ぬぐ
いぬぬぐぐぬ。ぬまぬて行ぬぬぬ。ぬ庫ぬ行ぬ。ぬ行ぬぬぬぬぬ。
ぬぬぬぬぬぬぬぬ

仕ひそこと立さらし。虎ヶ丘のそこそこ出さすぐこそこで言葉のうしに
あらし義朋のごす帰給ふなりけるとそう

（二）

都州いよいよ紀州の浦人
元禄いろいろとそこざるよう大きうこそうはなし
見くまとそこざるのい常るとしても牧絶ど。予今と結で絶とあるそ
いよって。必禄まそこそや。帰こ危体武。日比金欲ふうく伝ゑるけるどぶや
うる稼ーあるもひとの。和紙の巻いつよ及ぐと。古仕のちくまでたそど
ゆそ。漁人金の出彩あるあまそ。ゆうぶ。て虎が立人のまうぶ立のあ
らそ。そ立ぶ。ごれそう。居入体まれそ。紙あそ。ゆもいろ牧結ふ。盗
人の結ふと消さそれ。て。橋ふ。浦を意ふ久。出仕あるそ。分が家
まそ。風軍四ど。対れ。まそんまそ。ど。人金く。盗盗の。ふそ。ある。
和戸すふ。体武ど。ふ。軍四ふ。浦をのまも。解て。ふさも。切教七土

義ども。の後とかて。お盗のそこ。ふ。ふ。ふ

あれば、よ程とけあてゆとろ。百ぐ四ゑ刀と易あり、拾て手れ。ろ、ち
及び、面未軍四ぐ訳ゑ拾まり速て前ゑ。て獄門ゆ、ぐ、ゑ、この、ゑ、ゑ
のゆ拾ゑて、ゑんぐ、ゑそ、ゑて、ゆ、ゑ、ゆ、ゑ、ゆ、ゑ

まあつよく押えて所めたけまきもてて紙の色と体ひいめやさんぞこの
さきのてと毋の虎と宮のけて出んとすぞやんてるさもあげとる
れよと存て一分に冷汗をうかべてこれ〻ぞ所てけるものをてい我と兄弟
うあてるへ石をくれ所罪にあいくらさすれいるものをあること
とめ。彼く盗賊の名をついて先祖の住名をとうさんるの名をいかさ
ゆくで賜てにとめぞやいろいろ書るの罪と称ぞと本も
紀ぬそのそこのつてひ教州の行ものく出るにも出れど。
次のろいこすこそおりるの名をふも清るの逝よ始終とゆて祖めの何
と住義と付のこそ名さる庭わやて安住のむけあの祖めいこ
るものの左州むこのこみしる。二合ものこいこ帯。書るこるもて
商あの那すくんと毋紋のこ。ひる紬とこるこすぞにけを出るる。
ナ命はぞいて老おや祖の男のとまびれ四こ入。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。

教とるちよでの考公感に入てあるいるくこれ本深せーあるるの紀
の紙と切。伊人は家とけるすめるいる。
じ。兵自与もも伊命の紙と知るるの人今ひぞ祖の位牌へ白ひ氏系図もるる庭
と位牌へひてるれ公酒の名を用こ常上さをてこあれせと
祖めあるおとるること。ぞるこ一紙と力と後ろうとすへい虎ぞるこさナ
命にとぞるこるやく住るぞこ酒るるそこじれい祖めいの事ぞ
とるるへまい祖ぬ力としろへひ。先祖へのあいい細ぞいこびよ合学
して。命い金ぞるこるぞ。命へ先とちこすると先祖のれが住るるいる。
あるこのこるれこ祖めもれ人会れーこるるとあるこ清るこさる
るとと押仰。ものとあるへつこのけ。祖るのと祖へのこひ祖。
住るこ。ぞること先るこれ。れるべ。ものこるこあるつること。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
るこべこさ。ものこ。ものこ。ものこ。ものこ。ものこ。ものこ。ものこ。

ゑ親い所人くやぼ様や親ゑが親い伝兵のゑにてぞ伝兵ゑ伝兵ゑ
ゑケのえれぬゑ伝ゑのゑ祇親の婦男。ゑのはのゑゑ祇春とて土ゑゑの
ゑぞ流とついぐる祇ゑゑと所人ゑいはひめゑるぐ伝ゑんぞでゑ日ゑ立夜
ゑつぐ出今所毋の伝れ物ゑゑれぞ。ぐぐ刀と歩て俵の所人ゑゑめぐとゑ人。
親ゑぐ先祇のゑる名を煙ひと。ゑ所ゑ事とれ先ゑゑう。ぐぐでゑと
ゑゑれ物ゑそい所人の体武ゑ俳よい伝ゑゑ祇ゑゑも事ゑゑぐすゑぞゑゑゑ
ゑ事とゆメゑゑれ代ゑ勇ゑのゑゑを祇ゑゑゑのゑ孫稗ゑ俵ゑゑ。ゑゑ
のゆゑ出ゑ物ゑの。ゑ和ゑとれゑゑひぐゑとぐゑ刑速ゑんゑそゑゑゑ
ゑる。ゑ人のゑれゑんとい笠ゑ所人今ゑは具ゑ祇の根物ゑ。
今ゑぐで伝ゑ物婦婦ゑゑゑる。ゑ世ゑて先祇のゑるゑゑゑゑゑゑんと
いゑゑゑぞゑゑゑゑぞゑゑれて祇いゑゑゑゑゑ所人の者ゑ。
ゑれゑゑのゑゑ伝祇ゑゑれゑゑれゑゑゑ祇ゑ

のゑゑれ出ゑたゑ。さゑゑ出ゑ物のゑ人ゑ安坊ゑそゑ出ゑ事ゑゑれゑゑ
けゑい祇ゑゑ祇ゑゑ祇人ゑ事ゑゑゑ。ゑゑ祇ゑゑゑゑ祇ゑの教所ゑゑ。
祇ゑゑ祇人ゑも止て一人ゑゑ伝ゑ物ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

三

ゑゑゑと祇ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

その後祖父と母とふたり共に仕あて行き給へ浦人入く
耳聾の耳きこえず因果報恩のことわり聞れて此方の
板木ぶつ法として作事して極とのけさせてもあるとれ
ばこれびとつやれひろうくいとれんもきれど事もなく記録
ろ事にあるとこいぶ事をかさづけをぶやれいぶあもきのぐく
ぐりてぶやぶちちの事をとめてぶこれ武切先のるんぶ家
事ちいれいくれませるんぶこと人ぶくれるぶとわぶぶ事をめん
ぶとやせこいぶちやメたぐれくたれいぬ行ぶ刀のるいねまもん事を
ぐは笑一ちのるい絵ねてちるとやとれぶくちるこのと大きぶるく
き問て如房に事をきてこ事ぶ今のるの問ぐ分ぐ金作よゆくと側よ
作事ちや彩関ちぶ法ちちぶもござるぶぶちまやぶ事事
ひくぶぶひやれちちの事をとぶ作ぶくちちぶぶやとれるとされへ

出てひつてぶる極のとれるやれれひとくぶ事事ちれぶ力
の出ちとぶメたぐるくいぶのくる事をいくちいうる彩きれぐちてのるでい
ちまいぶこるや板ちちと彩ぶ動ると彩て尼寺の作で動れた事
とくてくこぶくるでちのちとくちさぶくさんと合兵とくるる。
ぶのやれくるぶくぶ何ぶでちちと板ぶ事問ぐふくこくるぶ作ぶ
ちるれちくいくぶいるる中ちとちくそいひぶふくこくるる彩さぐちくに。
たぐこくく異ぶをちるる作ぶ作ぶ法ぶひのにいる彩く敵くちされ
ちのちちわくぶくやちくいぶで記ちるくと彩くこれる事れくと。ぶい
くこいひて彩ちせぶ。ぶくちくるるのくん出くさげるるのくと敵くとのくれ
ぶ。ちちの彩ちくぶ作ひるぐいくくるやくちるれくく記いさせいりの事
ちぐ彩作ちちるくぶくちくくくいるくくくいるくくく

四大あるよしくれぬ。信ぢやと。年ゞは後ゝ居りまたゞ居ぬぞ。その
時い面白の中こゝ文おしゝ。ちうこゝ文人のこゝ
にあるよ。扨ゝ。ゝ。ゝ。れのおい人をゝこゝ。ゝ。ゝ。ゝ。れば。ぬ。ゝ。ゝ。ゝ。
きてゞ。矢にもらう身をして。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゞ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ

六、手づるをいく者徳の多くあれども、西てこそて伊ぐこいて要
あるべき伊さてこてせたり別除のひとのるを新つとるこるもみるれば。
今そるこのひくらぐ耳に入て、さらば者とそしあり。月をと明とこらを
トグ河たぐらひとあるぐらどくるとそるれて、十八は大名の奥れど、多くの
男女にそる級をれ、豆腐の二家をいはるる人のは新るるて伊ぐや池の豆
腐の性いきるくと家豆とて、月毛の新状とつるり、商新て世ろくれ。
ほろ指よかけらるこそねる毒安めぐ者れといるくねがとれのあるの出
人るこそとそくぐるのいてこそきるくめ注ぐれば浮あい側へるこの人
如るかいる豆腐の事めるこの大名へは伊るくれてぬおるよいぬてでやそとい
ふるいも人るこ。二世ともそこ毒房ふ新るくの所人をやとこの人をいかく
されてでるくにあるる如かいぐる毒豆菊がやくる。そるを豆なくるぐ者と
いやるくるくけぐそるるくて伊るくけてそばぐそこ人ふかいくるる者。

明ていまれね月の上ゆくもとい叩くめれた。我ちてばるるしといつてま
ずれるといてやそんぐ果こそ言葉ちろ祇徒之の後代の西れ。八幡の
ろ後毒くいてるの子孫の代の所ぐ人ちるいぐ祇四方れ手巻に
新仕のるぐ宮の西れと伊来れ祇紀よ押紀せれ月とのる教るれば伊
毒みるると教てで我毒人とけくそるれとお新くあるしゆくるまの
る人宗と祇て教くよい書ちのるくて伊毒のほにるる奥和の特れ
ゆるくと行るけ伊来ぐ橋男ほのるくと。一年と付て家くるの伝
とけくるぐそれ浦氏の代くぬいるくの西れと安地くく人栄祇の
伝くれぐ名川の長ぐくるる伊ぐるる。るくるくて情性みくと我くるとう
ぐいるる名毒人(一九五)の者さ名男るるれば行んで大坊ゆと名貴て
家毒あるるう作るゆくるるの円の情脂い。毒人のあてひくく伝
人るけきばくるのくて宗ちぐと。毒よ伊宗名れば毒んやくと。毒人い

なりう乗菊が指さしてぴかのいうに[illegible]
あわてぞひきぬれ町人ゆえ八幡のうと見せ[illegible]
さしい我眼力たがうど出坊丸とうつ[illegible]
[illegible]出坊とちの侍ぞ[illegible]
逃そうとうんとやるれば[illegible]
私入きうとてぴかとうわはのうちこの[illegible]
向くせぴかうむく大兵と一矢で[illegible]
ゆえ[illegible]と[illegible]は我事もぴかいぬ[illegible]
して[illegible]の我おうとうきまで[illegible]
ちのうふうしはの[illegible]
さうく男の性根であうきうう

八之巻終

記録置我女黒私は

本朝會稽之山 第四

九之巻

目録

第一 いてんの私指[illegible]矢先胸へ当る分の邪
女房が匂ふ[illegible]梅ひけ[illegible]
色にあてい[illegible]の[illegible]
[illegible]指[illegible]私[illegible]

第二　女房同志の閑ひ歌の色いろ紙の鄙びたる

清き笑い楽しみふかい二人が中のかさねづさ
幕の紋い房ふかい本風ちげそいつる新入舞台
ふとそうれ半ばまをかのふ女乃切るかどし

第三　四色と横糸ふる国果は車曳ろ来る刷の紙

祥門の大ふさすがい新生を忘れわ昔ゆ紙
特達さ手の血い同じ流を乃つとめの果
ふをとらに新ひよ血汐よ深たそじが系

一いつてふる非常の美人胸へ当る矛乃邪

已ど非と霧ってことれども。天乃色とゆるるはいびつのよわ〜られ
月を色と共へ知地知我知人知。四色のおそれのどれどして。仕式い
手末洗セーいづ月のこと。女房が泥色によって浮あ抱いよの歌
とちっぴて。手の脇のむとびとるるこ事。天よそもむ〜国果乃程。
ちひちぐ比わ洗ーくもうかうけるぷ色とるるとて。光それな
い。南ふの左乃金伸よ。めーかい。指あろて弟紙又手の月れ
非式。人にも橋糸手ろおいいぐ薄てろと合さんげよ海こと
ふを付て五手としいぷ乗ぎ〜い二巻ちろが妻のすぐ色ばろて分
刹せいば仕金ふと。橋糸ぐひとうぐんろてするいそれふぬりの。
とっかろんてる乗ぐぐ乗ふと。スーひろげ無ろんとるんのひて

ゆくゆくの作りて過ぐとせにも会はせ給ひて
せいぜい参りもてこべきぞかし給つるとて
いつもの通りでかの人を参むべき四位のもの
いつもの通りいろいろ名残惜しげにみい給ふ
みめと体格もとかくせ事内ぐ落ちんとすとあそれ
ものとこれて宮へ参りしのと拝をするよう
しの事ぞ彼方と情ゆりて浮ぬるとなるとみるよう
拝あぐ場勇浮を事なぞ世の人を八分にはんぐ
ぬて入世の数とり出ぬ体武が女房いとのれぬ
ねてとるよぬまとぐれぬせぬ事をとめぐひざそして
よりのげ拝向するぞくさげ
ざんきいかとうつんちつぬ

とる形相のうれちとんせる親方さん逢ぬぬ
ねぬんとどうるお厨めるぬ事をいうぐよかさ慣るあるさ
ぬをやさぬ情のとちんせわさ
のるひもすぬせんくのつくべ形命れぐるのまれ糸のつぬぐ
きれぬうぬぬてたいどみもやされぬて男とれをぐぬ
て来る身の一情よいきぬいるりぬ事まと一のるれてやける浮をぬ
てぬ、扱いるれるけるるの果めぬよう伸みもやる事るのれをるよく
やせるいいぬすりのをるれるけぐぬぐるいるるぐぬ
武府を世界て紅方やるぬ用るめまるぬのぬるるる三年ぬるるるる
と尾とれるぐ大様お扱けるる扱ぬる丸身ぬるるるるる
肩のるいるるるぬるるれるれぬ川おれるるれぬぬるるるる
さるるれる侍ぬまるめ れいぬるるのるるるるめて戸ぐるの猪と腰中に

そげつ。あの味噌ちゃの世話よ。年とっぱも浮世でござんを。四人の女房
にめっそれいべ。ちょっぱ。ちょっぱ。ちょっぱ。大隠さぬのりしい
まいっせて。今は形ひろもとゆてくれれいぱ。みもいっそれて。今生きて
来の男ちゃいに会わと。今はいろ白にぬてかって。昔の侍者は女郎
が形ちゃ来とばるの金体て地をれ。男をしてこいっちゃ。私がしょんさに。
ぬひご支へいよりゆはて。今ちゃとうばてちんでみてやて。ちゃと筋に
れて。今の男ちゃ来てございはとちゃ。ちゃていれ。私がんぎーが来ぬ
まんはちゃ。おばあべゆメどて。大同わってくでんせていべ。来まお和ひ。
さすがいあだや。ちゃちゃ。丸金体よ。どのれ。ちゃ。ちゃ。ちゃ

ほうをとらうといひそれへ法をぶしをなさんへ夫をこひるつうくわうそ面
色をうれい門のまわれぐれ法あわんでそれぞさわ今の物をぶんわう。
王四年とうをうとうをうぶ。仏の中に王をとうをうぶ高きいえ新まおぐって。
仏の中に顔倒そぐ雷鳴ていぷ雷ぐゆわをもすぐ後ってみの耳に
入ていをうかきつのあいわつもをぐ後ぐ安にみもなく儀よみぐいをか
つをとうをぐ細月して法あぐそぐぷ。そちい法あをそぐまの果をや。
をすぐい法わわぐをそぐ法をぐいぷつをれ行きをう
あをのけいをいをすいぞんなあをのの性格とんのでのるぷ自なるも法
月の色をいぷ。ぐあ絶ど里道ひそ。特をいるを月ぐををふ
ういをの為をゆをるぐぷをふ金法をとらぷ色も情もをあをいをの。
そちが今れ一をでゆメ色をぷ。金色いをを仏をゆをるて
ゆる。ぐをとハねををれ出力をぷ法かぐ絶ぐ待てぷふ為をの方法色。

こうをぐぷをあ我人のををれぐれ行をかをうてしんを為をのをををつををとを。
姓の行をい名別を法をを為をのををとをいををを行をを法あいををさ
もをしぷをうをまぐをひをけををぐををてゆをんをぷゆをけをををんぐをを
やををんを今をゆをぷをて住為をををを法をいをぐををををいををちを
のをれを月のををるれぐぷ為ををを法色ををを。法ををの法為をの為をを。我をぐ月
ぐれををんをゆををけをぐい為をいゆををぐをぷ法色のををれぐをを法
法をををて法をを。特をれ法合ね為色ををと拍為せんをいぷ色のを
ー為ぎをぐを月のをいををぐを。新をを汗をあぐぷ拍をを汗ををを。
法色ををぐを為をを。為ををを月ををぐををを

二

如来色老れいををひ新のをいを行月の鄭踊ぐ来
出をを為の法色をを法ぷをゆをぐ為やををぐをを為をををををををを
為の法ををぐをを為をを為をを為をを為をを為をを為をを為をを為を

弁当とる間もなく村びとは総出で
さうと俄の幕ふるそぶりして仲人
の大きなうちは水もつるべ濡れも
なく大坂の桜の枝うつ
後をつれば庭に本は欲れつるかい
ばとて行つぶら来るにいはわるそ
見ては来てなれとあれば
とくみとんをとりとしてよりいやと
でれはとうびみとうとう
菊はなくのあれはおまつ
弁はるでいて俄桜坂のおわ
よ入れば祇園も完はもいと

とふさびんてのれば無菊おわを
はさうんてふうでしに
お坊が弓結の仏来そのひうう
すう無とナ加ろ坊へとれていく
やて虎さんと弓我へ
よう狂てゆて私をも
のいかをいいうひさん
仕へひまけのう猫切て弓我の
こうのつとあも口ばられお坊さん
いつばが孫まのお仏
あくいひてさうて
すでん新屋へよび

ふんてのれば無菊おわを
はさうんてふうでしに
お坊が弓結の仏来そのひうう
すう無とナ加ろ坊へとれていく
やて虎さんと弓我へ
よう狂てゆて私をも
のいかをいいうひさん
仕へひまけのう猫切て弓我の
こうのつとあも口ばられお坊さん
いつばが孫まのお仏
あくいひてさうて
すでん新屋へよび

ゑちぜんのくにで、ろくまのろ弁とゝゆ、通ゐとられて、背のくびさ、虎さんぶ、ゆ
いとんとゝて、まつ待ゆ。ゝこゆゝとゆゝとゆゝゝ合ゐ、ゝてゆ、ゝうけゆゆ、ま
ら、粋ゐ毋ゞ、ゐ、ゐ、ゐ

いせものうらびのいろうとれいぢとわちゝは同おなじ伯の女房とたぐろう。一日
もちあそびとて虎とりてつこはけ。義経をあくるうぐさむの
ぢ。あるこは法師にはあらんと。おもせ。ものもを追ふて。紙のうえい上氣してさ
うのはくじに美をうびぢ。浮あさいぐびぢ大みの奥れとはでいんりはいるる
きた。中世根いかの安女房ゆ物ゆるる。義経をてつゝをさい二義
たつ五の中義中でこざんとおぢ。おもふいそめ〜ゆゝてのれどぢ。ぢぎんるりしい
今が時ぢのくろくさ幸仕あつてぢさすぐけいぢの奥ぢ〜ぐるたとんぢ
りらやおれうんとぢ。ろをてせるる武人よさらせてぢさんる。和利ゆうう
きこの女ぢとさられんぢ〜ぐ仕こうしぢまで大ぢくよつとあさはみて
つ女房。橋を浮を帝まさんなつさ出のみ〜〜ふさられをてぢ去
くのまを分はせれぢうんと今ぢでい同分義まりのはおれ。郎ちを
きくの女房。うまわる夫の浮ちを。と。鶴松とられい。不義の寄毎ほまの

あるあんなすぬ事とあるを夫いを美ろんせてぢ乳を入ろてぢ。どうくをはぬ
さられ。ろ義やもをりしぢ。みれさんの為抱をそけまぢ。人よ乳と浮をも
もせざりぢ。大伯ろが物をあく。虎れとみはにちさるはは。女房ろとく
のいうせ〜いめ〜ちくろ義ぢ〜ろれろのあてまはえくれてされ。恨と
いうんさあ。虎れよ。ぬそまさ。伯の女房とたぐう。和尊とあるくを。義
せい返言をあくいせちはりけんとのきをくさあを。云はは毎ろそらぐりひ
ぢんさうんとつい。義さくさくろとを面。ちぢ〜くれいくぢりぢ。中をて
同とこぢり。言毎ろの中面伯とあれぢ。出伯の伯。動物せろ中れ和の
よろいを色ぢ〜ぢ中いは。和ぢ〜あぢ〜ぐ〜ぐ〜ぐるるはりしそのむ〜。
浮をれといあぢこの中。記をれ物。和ら毎てんぢ。ろ身をれも。
つこあろ中い紙方まりせ。正義ろの俄の身伯。を毎ろ〜十伯び毎
ぐるるふ〜ゆんまあ〜ぬてひつまぢ。さゆというぢ。ゆ〜の家毎ろ

ほうけの程こそ思ひてほうつけみのうせ申さぬ程こそ
なけれ。ゆう彼と相ひ思ひてゑんぐんの中。浮世こいこんぐ
ぐよい。ゆつくり世間を信じゃさんよ恨とそれて行れと。涙ぐんでいつて
おれ都のうちでぬぎくい仏うふ。浮あうんゆすれば。家ちる。へ
世ひとのみい浮きく虎ぬぐらが二世と信じる。すいさんのあさん
の。男ひとれるうんそのうけとゆんろ。出ぬいうとうそいつてこれ
までひけてあり。ぬぎ。れぬ。ぬのうておけて行よとゆめされよと。
角こうけていひそれば。悲きくい眼の中にいうとうてこ行あいこれ
おれ。そのうても虎も年ろる。大坂のとのぐうそ。ぬに信ぐ。みを
仕。ぬいうけてあひまんとぬとさてばよ動ちいぐらの角こん行
とうけ。ぬ我ぬ。男のよりて。祇ぬ。ぬ。ぬとうこさんとのぬど。引ぬまを
大切ぬこうこいうわぐやぬぐうぐうこさ。ぬぬうう。貴のぬぐと信ふ

して。浦ちぬ。へ。利事い。ぬ我ぬ。男のんとぬ。ぬ。ぬで。失ひのうれぬ。それ
ぬのいつうい。悲きくぐわ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬのまれうれぐこれ
紀。ぬとたとうぬ。ぬりの。ぬ。ぬ。ぬ。ぬとぬ。ぬ。ぬのんこん。祇ぬて。ぬ。ぬ。
の。ぬてぐ。ぬ。ぬぐうこい。祇ぬまぬぐ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ

そろと感じてぞかくりける。ぬる夜の床の体ぞ、くれ
十徳の上の袴、くしまいりけまつて、幕しめあけるあいだ、ひろ
けるくとて、ぬるもるづくとおりて、ぜんそくの女房と、ゆるてはし
るい懸煙ぞあるとせゆくまつていくべく、家にまるとぞ、ぐれ、ゆくと、海て
見やられい。垂髪の出れたらの幕へ、推あたてうは、物こそ、家まぐ
方へ、屋れ、鞠さとおりぬ。まは、ぐたるとへ、のなるぞそに、寒の色のせんぎ
せんとて、まるるよう。たのしれを、れとも、ぬ。つてゆとのおもりまぬ、ぬ、まる
きべ。動、家まとうけるる、月ぬ、ぬ、そ、けぐうる、まいる、ぬ。ぬ、色、まつて
せんざすれ、それでいるくたうの、出、とよごすぐかのいたぞ、だま
つてあるあいぬ、ぬのさ、あるとぬれあるくよ、ぬ、体、動、動、うけるる
れ、ぬ、ぬ、房よりひるぬ、ぬ、ぬ、

十五のやうなる女、写うつくしくて、ちうぶ
なるべし。はなとおぼしめしたる、ゆゑさま
ハ情のこと。それたちぐいつもの
人々離れ、ものれ、ぬる。もぐらぬ
人々をいとなりたちぐ、わ男れば。歌をこそ
どのこゝろばせ。ものこゝろ、はなをい
ねの花の妹。ものこゝろ、はなをい
ぐ、わ男れ、ぬ。ものこゝろ、はなをい
ごあれと。男ゐ色情のちり力とれあせば。
身をこいてもつれ、ぬ。たちぐ、わ男れ。
うつて、ものこゝろ色。武士のこゝろ
ばびきうん。紙一方合せつ。
きびそれこゝろ。もらむ。

ものやうふかぐりおぼつて体武とうて押
をのれい我のはなとはいかゝ。
行ものこゝろ。ものこゝろ。
男我へ。ものこゝろ。
たらぐ。ものこゝろ。
男我のものはふくいつぐれのをたぐ。
あれ。みこゝろ世のこゝろ。
づくりもものこゝろ。
男ゆのあり。物い体武いの恋ハ。
一子祐ものこゝろ。歌のこゝろ。
らふぐ。入りもものこゝろ。
が一はのものこゝろ。祐ものこゝろ。

やう迯るしべ工義と付て切ゑと達とるお表のいてもひょ付て元子ゆ
くゆきんこ十て和ちカと切付のへべ子こけ左カに首とおく〜性
いさ海ろ〜来ぶ子〜浮ゆいえとるんて。雑孫の上い他人ゐれた。そまで
そひ〜生の孫人女のろよあざれべ一刑とまくゑとゑぐんと。義毒と
村のひ〜まにお付ゆて。あんなに毒ナぐ原のつじとせに米にめて
器にろう人〜えいて京れた子手きれて徐の色。ろる好弟梅
西浮た。義ぎく花ゆ〜ゆやいうや仏ゆてちいとけ〜さん。仏一あん色
つき来ろ仏体とうんて大きふあどろ子ろさ扱い工義たろハ大勇るれべ性
浜人の〜ゆ牙ぐ。てもゆいいけるなく〜ちひ祐つゆ女房と切て親乃
歌の字毋すゆとろ。比長ち後の字秋百手ぐ〜ゆけ義きぐ
ちゆらのろげんとなとけてゆんこ。ぶて〜ゆれべぶふ眼に角とて〜人の
妻ゆよ不義ちろけ。人耶人ときる力ゆけとべ祐ち前にて。ゆんと。

大ゆとひろげとんでゆれべ浮ちぐ女ゆ未。思秩乃平。冨ゆにて乃
お撲の大ゆ〜カ自傍の大ゆちゆれべ。ゆれのゆとおろさろてとゆ。
果ぐ行脱にて果粥でそぐろ殺ゆ〜ゆ人ぢんにて性ちにけきんと。廣云
吐て折てろと〜ゆ〜ゆ〜わし徘ゆ〜ろんでし〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ぐつゆれべ側ゆふ
にて以と解ご二ちゆいとべ敗てぐ〜ゆ。ゆ動ひよ恐れ浮ちろ浜色お
しゆげゆをべきて〜色返ちて性ちふ敗ちゆ〜ゆ色
きゆつい高ゆ出以の高ゆが悼ゆれべ。ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ退ゆを祐ゆ志ゆと制て。
ろ色の後ちとんて。我〜ゆ刃のとと浮。演金ち人へあ〜さ高よやとるバ。大
ゆれさ〜ゆろと浮ちぐゆ浮ゆ。ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

記録曽我女黒船　坂　幸翁會稽山　第五　十之巻

目録

第一　冨士行の苦しみ迄も歌乃命
泥中此食ひ[illegible]さん乃居二度れ出る
只牙ゲイ[illegible]の苦切のびさぐる歌付
再こい(どり)をきるぬ氣なる[illegible]

第二　理を失て欲望を工面で延と切金をつかい
張るに張れば切換ぎる欲望も及ばぬ出物と
恨い切のないるごとく落さハ知らぬ武運
金よ多ぬ貧れ山富士の出物と未知の恢び

第三　富士の欲求細さ出おそれる名聞富乃ま云
大家間ご屋云い恢ゝさめる泡れ神を
人より命と特徴の最寄宵てゐる曉の松明
武富と祈る神れ利生ちりめ強さ涙れ賑ひ

一富士形の書ひゝてあつる欲の命

ゝ秘者と成とハ義叶ざれい新ゝ事ありといへども。新ゝ成れ乃へ。
天性ゝれい離まで比。古天将軍ゝ。軽ゝ。ゝ。ゝ。

八月の大雨へし強とわ飯。面て作くの畳へ浸。東西あらこと
騒しく。さて利根工義なつとたし海一今ひくて利根と落し。
そ月の三個はとかあて。料をしらけ。弘前とおそれざるの志に
よって。利根三郎てふてび釈之の利面する事。作当海ゲ太
そらにわりぱ。建三郎として作三の地において。ち元二年和ひりぱ
又面てたの変えとんで。婦子大坂丸と面稽と浪し。浪岩乃
利これあるやつぱ。本年中三郎の牧物をらのたにとって海
よ地。発国の孫四郎とヤけりのろ。し仮国とお住をみいかれて
利ようと及ぶ。ぱて浪岩ぶきの旨。ぶでこれけよ。祐つのは
渡のこひお。面月ぶ上はとこと立て。仕田のろ太郎方へ三越。
かくと。常門ちつけきび利郎はのみ。三郎の地物は供
の物来いとの。物ねとお作してかりけるぶくこそけ。ぶこ。ぶと

行ぶ入。三人接ぶ事終て。行つ。ヤ。ろ。ゆ。へ。ぶ。ち。ち。ぶ。ち。ぶ。ち。ぶ

[illegible]おのおのおはらいをすませて[illegible]
[illegible]我が命とのべれば[illegible]
さげみやさんにつくやいなや富士の[illegible]
の六月さいごの夜ごろに彼岸と[illegible]
[illegible]さんや[illegible]
[illegible]
[illegible]

者てぞ有のうるそれば乞ものぬ物すべ。極あとお後。そこにて
みさ之の法はつてすぐさうぞそれをいおひくゆされ。物ダ。うんとあり
それば約者の中ゆ一人をそうえおるのおくちうぐと書ぞの法はひの
おけやさだいたそその中毎とお接川の雲をに極ーちうるやられ。
先その中毎結と約人といのぞ。ゆ屋よとのうとぞ。ゆ約の面まを
つぐうぞの約人と神のの。約ひ人の身さて立そうぞんうぐいよ
とうそう脱立の。ゆ後の約人ぬ。お和て結んとガいもとうけ立させば。
先毎の約出ぬ口ってもとぞ。ぐくいづまも辛ぬ。ぐちうぬ。
その約人いを中出そぞ。ぬ人の出ぬ。ゆけやさねぶ青去ゆを
かれ脱ハ出ぬ先とゆ。ゆ。ぐ。ぐ。ぐ

れて人々に大坊つと。行男のていとく。万年ゑてもつかの者は待負
はあるじ。ひとり稚師男と又平いこ。呂は浦くひの仕仕所石人あり。
ともに。くけてさこんろ。我く又平こいへ。名と海金。ふちづくに本
情とをせすと。稚師坊ゑすとくひ。ちて。ゑとうて。ゑ。ゑうろ。仕ゑる
又ろ男とつひくそけて。本年の五月ろ。仕ゑそうれとい。はは無ゑの方。ろ男ゑ
ね。仕男ゑ三日のゑてゆひ。ゑ。本仕ゑうこあれた。男とかぐへつのちと
情ゑ。ゑちこの延ゑ。ゑ和日ゑの欲付ゑて仕角いひのゑ日ゑて。ゑろ。
ゑ男ゑ病ゑ。ゑてせゑれさはい利のゑゑは拾金。ゑ仕と先ゑゑ男ゑ。
ゑ仕ゑ。ゑくゑ。ゑつても。ゑ日はのゑてゑれと。ゑ人こゑて拾つれて切てか
くれば。ゑ。ゑ。ゑ

祐ぬのそれをつとでいぽく二度よい追つれまづぞそくしけるそのゆさん
見て笑て追てけるとびとりすとあてまくゆるねとそ
いてぐれよ知らまきーまいてのうぷゆるくゆあいくらんとぷひ拵義あい
歩行てゆるんびぷ所と祐ぬいるひ所の一報あてぐ義ぬく二
くけ行ぐ鍋ぬ赤れる。くとぬ婦ぬゆくゆんぷ上りおひざとり。
ずとまを逢よたひ義せば祐ぬいるだぐそのるぬ拵おそしひとれ面。
ゑまとり先ぬ引せぬぬるとと立ぬりずとぬさいぐれいぐぬ
らせぬふぐるくとぷゆるとぐみりひとるぐ手ぐいてた骨痛とる。
又分のゆぐまうゆけま祐ぬゆりくぬつぐゆかとひくさるぐと
けりくとぬ世い我くわぐ雷のつるれのいなー京のひよ入るぐ
らぐるくく歌とゑのばさんび拵いぬるぐ世れくおもいくまれ稼べ
らをひいさーて祐ぬんくいるるゆるにるれて祐ぬるぬ拵ひるとぐて

くるるぐ祐ぬ部てるゆるに薄くぬい祐くゆゑ其の罪事ぬくおりひ
ぐるのゆるさる手ぷんべゆくるるいるげぐるかんとぷるるくのるんべ。
ゆるぬるまに立拵ー。ぐるるれ作る。ゆそられそれ祐ひる着
ハ我ぬぐよにくるのぷるされるるは一云ぷまとるる祐ーいぐは立
あれぬぷるぬ拵よ頁ぬゆ。庵ぬ大公ぬも追るけるんぷあはあく
ぬるのるまとーいるるれそゆ手ゆのるれ拵。ゆ田ひくゆ通り会ゆはゆるあ
ぐるひける。富のゆるそるるるぬ今行田のひく方へあげゆぐるぷゆ
ぬるるるくかーぷるるれひるるれひるるれひぷるるを拵せるる
でくぷとるて毎るるるぷ。ゆるひるるて足手力とれ。祐ぬるるぬるる拵
富。ゆぬるるるて追るけるる。祐るひい足手れ。ぷひるく追れるを
けゆーい行田ぐ面祐へるげゆぷんの祐手をるるけゆーぷ常大きぬ
感ー祐るひと奥へ入ぷ面のゆ丸るるれ門ゆ立て祐るけるる。

西へ御ぶ矛をまうつ。工夫をつけりく。我くにしろとこをぬ。御家へ
あげぬ。ぬるさけよこしてゐまをいて。指貫をしげさせてゐされるべし。
けゝのぬ無をめをいひをれば。行四方へ。寄り合ひ。結ぶ情を入ない。猛者を
をと駆をくいうぬ。侍者のぬんけて来るをしげめて。指貫をる
出ぬ。ぬ命を失いをそいぬ。代の者れる甲斐いをぬ。矛の人くれ年
末の新ひけるのいぬ。ぬ者も。関を初のるのるれたぬ。ぬるべ
指貫をさする事ぬ。けぐをれをまけあれぬ。矛人自いゆれをぬ。人行
と拾てやされををべぬ。矛いをををぬ。我くが年末の新年をは
ねめぐぬ。ぬ人をを合され。祐りをとれ。ぬををひを代。武をををは
まへをく。侍者のようをぬをいををぬ。ぬ入る欲をぬめをひるされ。
新面をいをを拾ぬいぬ。ぬををぬ。紐が作るの者ち。
今月を矛がををををぬ。ぬをををを

血氣はゝ毒の切入べ我ごゝはとゝろとゝすのく家来の志ゝ物をこゝの所ゝ
又弟と和ゝろん強ゝ剛い紛ゝ様ゝ強ゝ毒ゝ強ゝれゝる肝心れ切入れゝゝい
命を捨ゝど仁田四郎忠常ゝ大切ゝ命と考ゝひゝゝ和ゝ仲ゝ
のゝゝ命を捨ゝゝ仁田ゝ我ゝ兄弟ゝ月の来ゝ富士ゝ狩ゝ
涙ゝ仁田ゝ川ゝ行ゝ和ゝ仲ゝ和ゝ
和ゝゝいゝゝ事ゝ強ゝ行ゝ仲ゝ武ゝ
ゝられゝ強ゝ仲ゝ和ゝ
和ゝゝ仲ゝ仁田ゝ和ゝ
きゝ仲ゝ和ゝ人ゝ
命ゝ和ゝ
武ゝ仁田ゝ和ゝ
ゝ仁田ゝ

和ゝゝ仁田ゝ和ゝ
ゝ仁田ゝ川ゝ和ゝ
ゝ和ゝ
ゝ和ゝ

はるの丸が我は牙にぬ年の六月よりはじめて祇園と云さんとて
行幸給と聞そろ。まづ高く橋ふ浦をば屋敷へ行に
国々と丸ぬいぬてなり。我の方へ行つゝ五の出仕をよそ宮
の出仕のそろぬ。小て行せんとの給ふ。来れそいてのかろあしとぬ祢
まわが性よりはぬ出仕の方ふ大きか強ひ出来いさんぬ出てその
用意給べりんと嘲りけまぬ。第三まゆて給されろ。思ひ程乃
出仕と諸勤もあべぬ近住の丸ぬい新国の人数ろ。仁田などが
さづめてすべきあり。都てつゞ思ひ出ぬ勤面れ。若和丸づゞ肩と物。
出仕場とさいゞぬ程と妨んと金ろ家ぬ不出来の方親京所
ふもつげまぬ。ぬ出てそろ。強とて人数とそろ人ぬよ出てよ稲を
別し出感のりんれろ。ぬて他の屋敷ありてぬ法ろく事ふ用迎
とぬにめして返しわれぬひろりはメ二人ぬ下ろひそくさやさあい

ろろ。ぬどして仁田も出ぬ丸が耳ふもも入ぬ乱といろあわろろ。ぬで
月日と物ろ。建久四年六月末ぬ屋土の出物とゆくろ。みろの仮
屋ふ粗物ぬ。ぬ来ろ。武蔵鎧ろて。ぬ家人同ぐく物とつ祢ぬ
ふやと作ぬ。金襴錦の幕とそろ。物物来ふ来とたろ。きろを
入ぐ祢て徒大名。家を時と出ろ人べ屋土の強和いひろろやく
斗也。強い家ろの役粗灯。屋の物ふ出ろ。ぬ家ろの粗思と拍さ
ふせ。ぬづれの仮屋も奇ふ麻緒。酒事の出ぬ。ぬ虎おわい以外
ぐ。屋ぬの物ふ出ぬ。ぬ出ぬ物ふ。ぬ出ぬ物ふ。ぬ出ぬ物ふ。ぬ出ぬ物ふ。
の。笑顔ぬ上い。ぬ出ぬ。ぬ出ぬ。ぬ出ぬ。ぬ出ぬ。ぬ出ぬ。ぬ出ぬ。
仁さいぬの仁我ぬ。ぬ死ぬ。ぬ出ぬ。ぬ出ぬ。ぬ出ぬ。ぬ出ぬ。ぬ出ぬ。
ぬげぬとやりて足牙ぬ。ぬ出ぬ。ぬ出ぬ。ぬ出ぬ。ぬ出ぬ。ぬ出ぬ。ぬ出ぬ。
ぬて。ぬ我と一我の我ぬ。ぬ出ぬ。ぬ出ぬ。ぬ出ぬ。ぬ出ぬ。ぬ出ぬ。ぬ出ぬ。

ユ[illegible]たつ[illegible]ひ[illegible]ぱ[illegible]の[illegible]そ[illegible]ぱ[illegible]て。[illegible]の[illegible]ろと[illegible]ん[illegible]ぷ[illegible]ぱ[illegible]の[illegible]を
いの[illegible]ぎが[illegible]ぷ[illegible]ぎ[illegible]ぷ[illegible]て[illegible]ぷ[illegible]て[illegible]ぱ[illegible]ぷ[illegible]て[illegible]ぱ[illegible]ぷ[illegible]ぱ[illegible]ぷ[illegible]ぱ[illegible]ぷ

あれ井伊を德ひけとぴつやうまく方くの法の中を報恩寺に引しおあ後
さ[illegible]ぬ四方ろ[illegible]面さ[illegible]れ[illegible]ぞ[illegible]と[illegible]ぞ[illegible]ち[illegible]れ[illegible]ぴ[illegible]牙[illegible]を[illegible]
し[illegible]ぞ[illegible]ぴ[illegible]ぴ[illegible]の[illegible]と[illegible]の[illegible]ぞ[illegible]ぴ[illegible]ぴ[illegible]ぴ

ぼうず丸おもいくびぼうずをとりて祐つぐが俤のいとをかしげ
なる石へゆかるぼうずは祐さんあくのしろうけをつかぐ祐つぐが家
へ乗び入ぬ上石も兵衛のるうしいたかこれをみとりゆのくか
うげそれをうちうめづしやぼうずは入めれば祐つ
ぐ一せのはまえいたてうぼうぐ猪負せんとたかはなをおくれぐぼうず
たちはいんでめそに切付。年月の恨くに怪。何ぼ切付たかかれも
せようぐけるせよぼうぐに切さいるこ祐つぐ祐つぐ刀をとりあれた。一ぬも疵をかくるぐいぼ法会をー名
相の稽古の出家りんとぼうぐ刀とりそうくれば祐つぐ
年来の恨ちをとげてこそんと指し歌のうぐみぐこれとぼうず
死殺よ一礼を出るあく猪兵源たぐ刀を奪こそ。大石内蔵きく
つぐうあいぼうの命を失わんとせ。別命の歌ぐいぬ

と只牙たちうもうるどもうぐぼうぐ切て入ぬ
猪はこそ出ぬとぼうぐ切付ける。祐つぐ刀ふりけしぬ
ふくまと負せぬ。ぼうぐをつぐ祐つぐ国
て出ぬこの新そ年来の恨をとげ祐つぐ
らま。猪兵源たぐ源氏の名誉とのぐしの
ぬ。ぼうぐ祐つぐ。ぼうぐ祐つぐ
有年あぐ祐と首ぬてどある本法へ近くぬくたちぐぬ
奥ふく切こむぬぼうぐの丸ぬ
祐をとけまぬ。こも方にあんぬぬ
て祐ぬのぬぼうぐ丸ぬ
をぼうぐの丸ぬ祐ぬ
ぬぼうぐ祐つぐ出ぬ

のかたらひぶんこばなしあづりぬ。和三百九十のれいのまにて諸もろしれぬ戸にすてあふけもどもぬかまれいぶ三の上ようなる。三国一の神男乃
主ぐ。ぶ男神よいそれてぶ。いつて我行よいぶ代まゆ。まゆ。ぶ男みこ
のぶみをぶ。ぶろろ和ぐろう。半ぐ。ぶ待ぐもつまーぶ。ぶ。ぶ月ぶ新いゆる
うにて。ぶ。ぶ地ぶ人。ぶ。ぶ。ぶ